奈文研ニュース

No.45 Jun.2012

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.go.jp/

奈良文化財研究所創立60周年

奈良文化財研究所は、文化庁の前身である文化財保護委員会の附属機関として1952年４月１日に設立されました。本年で還暦、創立60周年の節目を迎えます。

研究所創設の契機は、奈良県を視察した吉田茂首相が、南都諸大寺に伝わる文化遺産の重要性と保護の必要性を痛感し、奈良に美術学校もしくは美術研究所を設置する構想をもったことによると伝えられています。その意を受けた文化財保護委員会は、文化財の宝庫である奈良の地で、専門を異にした研究者が実物に即した総合研究をおこない、その研究成果を文化財の保護行政に役立てる目的で奈文研を設立しました。

創設時は、奈良市春日野町に所在した県立商工館を庁舎に、美術工芸研究室（彫刻・工芸・絵画）、建造物研究室（建物・遺跡庭園）、歴史研究室（古文書・考古）、庶務室の４室体制、定員15名という小さな組織で発足しました。この商工館は、1902年に奈良県物産陳列所として建築史家関野貞が設計した由緒ある近代和風建築で、庁舎移転後の1983年に重要文化財となり、現在は奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターとして使われています。草創期の３研究室は唐招提寺をはじめ、西大寺、秋篠寺等の総合調査を実施し、大安寺や薬師寺では南大門・中門跡の発掘調査をおこないました。

その後、国土開発の波が奈良にも押し寄せると、平城宮跡や藤原宮跡の保存問題を契機として、1963年に平城宮跡発掘調査部、1973年に飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設置されました。また、国土開発に起因する埋蔵文化財問題に対処するため、1974年に埋蔵文化財センターが設置され、1975年には飛鳥保存に関する閣議決定に基づき飛鳥資料館が開館しました。こうして業務の中心が次第に発掘調査や埋蔵文化財の分野に移っていき、予算や定員も増加しましたが、1980年には美術工芸研究室が奈良国立博物館に新設された仏教美術資料研究センターに移管され、美術史部門を失ったことが惜しまれます。

現在の奈文研は、企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、事務局としての研究支援推進部、展示施設としての飛鳥資料館からなり、平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査をはじめ、文化財の保存・修復、遺跡の整備活用手法の実践的研究、新たな文化財類型である文化的景観の調査研究等、文化財の学際的、総合的な調査研究に取り組んでいます。また、これまでに集積した知識や経験を海外の文化財の保護と修復に役立てる国際支援事業の機会も増え、文化財をめぐる諸外国との共同研究や国際学術交流も活発化しています。

また、近年の最大の変革点としては、国の行政改革による独立行政法人化を挙げなければなりません。2001年に東京文化財研究所と統合して独立行政法人文化財研究所となり、2007年には国立博物館と統合して独立行政法人国立文化財機構の一施設となりました。さらに本年１月には国立美術館・日本芸術文化振興会との統合が閣議決定され、2014年度から新法人に移行することになりました。このように目まぐるしい組織・制度の改変と予算削減が研究所の日常業務を圧迫していますが、今後も文化財の地道な調査研究を通して、日本文化の形成の過程や特質をあきらかにし、国内外に日本文化の素晴らしさを発信していきたいと考えています。

今年度の60周年記念事業としては、秋を中心に日中韓国際講演会（なら100年会館）、国際共同研究成果の展覧会（飛鳥資料館）、東京講演会、60周年記念式典等、各種行事を計画していますので、皆様のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

（所長　松村 恵司）

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第171次）

甘樫丘は、多数の谷が入り込む複雑な地形で、今回の調査地も、南東に開く谷の一つに所在します。これまでの調査では、広範囲で建物・塀等が見つかっており、7世紀から8世紀初頭に、谷を大規模に造成し、土地利用をおこなっている様相がわかっています。

今回は、2009年度の調査区の南側、谷の南東部分の谷入り口部付近から、その北東側の丘陵裾部にかけて、880㎡の調査区を設けました。調査期間は2011年9月22日から2012年4月26日です。

調査区北半の丘陵裾部は、後世の耕作で大きく削られています。調査区西南部は、南東に開く谷の北側斜面にあたり、南へと下がっていく地形ですが、この斜面を人工的に削って造成し、上下2段の平坦面を作り出しています。このうち、上段平坦面では、2009年度調査で一部が見つかっていた硬化面や石敷の続き、方形遺構、赤化面およびそれを覆う掘立柱建物1棟等が、下段平坦面では掘立柱建物1棟等が見つかりました。上段平坦面の上には、炭片や焼けた壁土が多量に混じった土が20㎝程度堆積し、さらにその上に、上・下段平坦面を含む谷全体を一気に埋め立てた土が、厚さ1.5m程度堆積していました。これらの土層からは、7世紀中頃の土器が出土しており、上・下段平坦面の遺構は、いずれも7世紀前半から中頃のものと考えられます。

上段平坦面にある硬化面は、灰色や暗赤褐色を呈し、高熱を受けて硬化したものと考えられます。大きく3カ所に分かれ、うち、形状がある程度把握できた2カ所は、北北東－南南西に主軸をもつ細長い硬化面が、幅約1.6～2.0m、長さ約5mの範囲で残っています。北側がやや高く、緩やかな傾斜をもち、窯の床面や地下構造の一部の可能性があります。

方形遺構は硬化面の東側で3基見つかりました。一辺0.8m程度の不整方形を呈し、表面が赤化したり、焼けた壁土が堆積しています。その下部には、溝や土坑が付属しますが、性格は不明です。

赤化面は、黄色粘土の整地土が被熱したものと考えられます。硬化面の東側、方形遺構の南東側で見つかりました。東西約2.5m、南北約1mの範囲に拡がります。これと重複し、1×1間で柱間寸法が東西約2.4m、南北約2.1mの掘立柱建物も見つかりました。これらは、炉と覆屋（おおいや）の可能性があります。

このほか、調査区西南辺には、北西から南東に流れる幅1.2～1.5mの石敷溝がめぐっています。

下段平坦面では、北北西－南南東に主軸をもつ南北2間×東西2間以上の掘立柱建物が見つかりました。柱間寸法は、南北約1.8m等間、東西約2.4m等間です。建物の周辺では、薄い粉炭（こなすみ）の層と粘質土の層を交互に重ね、整地がおこなわれていました。

調査区西南隅では、谷部に堆積した炭のほか、建物にともなう整地層の粉炭層が一部露出したと考えられる炭溜まりが見つかりました。

今回検出した硬化面・赤化面・方形遺構は、窯、炉等、火を用いる生産関連遺構の可能性が考えられます。この場が一種の工房的な施設の一部であったことをうかがわせる発見です。従来、この谷では、7世紀前半から中頃に建物や塀が展開することが分かっていましたが、谷の入り口部付近では、土地利用の様相が異なっていたことがわかりました。

ただし、今回見つかった遺構や遺物からは、何を生産していたのか等、その具体的な性格を直接示す手がかりは得られませんでした。現在、整理作業とともに、土壌サンプルや微細遺物の詳細な検討をおこなっています。　（都城発掘調査部　清野 孝之）

調査区全景（西から）　右手前が谷入り口部

手前が方形遺構、奥に赤化面、硬化面（東から）

平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第488次）

平城京左京三条一坊一坪は、平城宮の正門である朱雀門のすぐ南東に位置します。史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていたこの場所に、国土交通省が平城宮跡展示館を建設することとなり、昨年から奈良文化財研究所が継続して発掘調査をおこなっています。

この坪は1986年から1996年に奈良市教育委員会等によっておこなわれた発掘調査によって、築地塀等の坪を取り囲む遮蔽施設をもたないこと、坪を南北に二分する幅約9mの坪内道路があり、木橋によって朱雀大路と結ばれていたこと等があきらかとなっていました。

また、奈文研が2011年秋におこなった調査では、奈良時代前半につくられた大型の井戸や、平城宮造営時にまで遡る可能性のある鉄鍛冶工房群の存在を確認する等、予想外の成果をあげました。今回の調査区は秋の調査区の南側に位置し、坪のほぼ中央にあたります。調査面積は1,584㎡、調査期間は2011年12月22日から2012年3月30日です。

調査の成果は、北側でみつかった鉄鍛冶工房群が続くのでは、という私たちの予想とは異なるものでした。すでにその存在があきらかとなっていた坪内道路については、今回もその南・北側溝を約44mに渡って検出しましたが、この道路が造営される以前に、複数の南北棟建物が建ち並んでいたことが新たにあきらかとなったのです。その中には南北4間（約12m）以上×東西3間（約7.2m）の巨大な総柱建物や、南北7間（約21m）以上×東西2間（約6m）の廂をもつ長大な掘立柱建物が含まれています。各建物の東西の柱筋は揃っており、同一の設計基準によって計画的に配置されていました。また、鉄鍛冶工房群は、坪内道路よりも南側には続かないこともあきらかになりました。くわえて工房に由来するとみられる炭が混じった整地土が道路の下層でも検出されたことから、工房の操業時期も坪内道路造営以前に遡ることが確定しました。なお、今回の調査区内では坪内道路と同時期、あるいはそれよりも確実に新しいといえる遺構は確認できませんでした。坪内道路造営以後は広場のような空閑地として朱雀門、朱雀大路と一体的な空間を形成していたようです。

今回新たに確認された建物群と、北側の鉄鍛冶工房はいずれも坪内道路造営以前の遺構であり、両者の間に遮蔽施設等はありません。建物の構造や規模からみても、同時期に坪の北側に展開した鉄鍛冶工房等の現業部門に対する事務・管理部門の可能性が高いといえるでしょう。また、建物はいずれも掘立柱であるにもかかわらず、建物間の重複（建てかえ）がほとんどみられないことから、これらの建物群の存続期間は比較的短かったようです。興味深いのは長大な掘立柱建物の柱穴からみつかった柱根です。長さ60㎝、直径20㎝の柱根が、柱を立てるために掘られた柱穴（柱掘方）の底面よりも20㎝も沈み込んだ状態で出土しました。奈良時代以前には自然流路が通る等周辺の地盤は軟弱であったと思われます。その上に十分な地業（地盤改良）をせずに大型建物を建てたために、柱が自重や建物の荷重によって沈下した可能性があります。

朱雀門の目の前に位置するこの一角に、大型建物群を急ごしらえで建てた理由はなんだったのでしょうか。建物群は調査区の南へさらに続いていくことがわかっています。その答えは、今後の南側の発掘調査によってあきらかになるでしょう。

（都城発掘調査部　諫早 直人）

調査区全景（南東から）

掘立柱建物の柱穴（柱根が柱掘方よりも深く沈下している）

藤原宮木簡の世界―東面北門周辺の木簡―

木簡は、その時代に生きた人の生の声を伝えてくれる、貴重な資料です。藤原宮木簡は、大宝令施行前後の変革期を生きた大宮びとの横顔を、あざやかに照らし出してくれます。

現在、藤原宮跡から出土している木簡は、16,000点あまり。その4分の1にあたる約4,000点が、東面北門（山部門）周辺の外濠や内濠等から見つかっています。その内容は、宮内省（くないしょう）・中務省（なかつかさしょう）やそれらに所属する役所にかかわるものと、天皇やその周りの人々が口にしたとみられる海産物等に付けられた付札（つけふだ）に大別することができます。

今回は、奈良文化財研究所創立60周年と藤原宮跡資料室土日祝日開室を記念して、4月7日から5月6日までおこなった企画展示「埋（うず）もれた大宮びとの横顔－藤原宮東面北門周辺の木簡」から、代表的なものをご紹介しましょう。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

フナのししびしおの付札　「鯽」はフナ。「醢」はししびしおと読み、今日の粕漬けあるいは塩辛の類と考えられます。とても丁寧な作りで、文字も非常に端正です。

長さ一五〇㎜・幅二五㎜・厚さ五㎜

ナツアワビの付札　「夏鮑」は、夏に採れた旬のアワビという意味でしょうか。藤原宮で作られた整理用ラベルと考えられますが、あるいは、志摩国（現在の三重県東部）から送られた贄（にえ）の荷札かもしれません。

長さ一一七㎜・幅一五㎜・厚さ二㎜

銀銭にかかわる木簡　小さな断片ですが、あなどるなかれ。上の二文字は、左に金偏を補って「銀銭」と読むことができます。和同銀銭の出納にかかわる資料の可能性があります。

長さ（九四）㎜・幅（九）㎜・厚さ三㎜

※写真は、すべて実寸大です。
欠損があるものは、長さ・幅に（　）を付けています。

醤と末醤を請求した文書木簡　「今すぐに必要なので、醤（ひしお）と末醤（まつしょう）を支給してください」という意味のことが記されています。表の末尾から裏の冒頭にかけて、「醤及末醤」と見えます。醤は醤油の原型、末醤は味噌の原型となる調味料です。請求したのは、裏面末尾の「馬寮（めりょう）」（馬の飼育を担当する役所）。請求先は、大膳職（だいぜんしき）（大宝令施行前なら膳職）でしょう。今すぐにと言いながら慌てた様子はなく、一つ一つの文字を丁寧に書いています。

長さ一八九㎜・幅三二㎜・厚さ四㎜

（表）

（裏）

藤原宮の門の名前を記した木簡　「多治比山部門」と書かれています。「多治比（たじひ）」門は藤原宮の北面東門、「山部（やまべ）門（もん）」は東面北門にあたります。藤原宮は約一㎞四方の広さをもち、各面に三つずつ、合計十二の門が開いていました。それぞれの門には多治比・山部のように氏族の名前が付けられており、警護を担当した氏族の名に由来すると考えられています。

長さ（一八〇）㎜・幅（一二）㎜・厚さ四㎜

「奈良応援せんと実行委員会」が義援金を贈呈

昨年の3月11日に発生した東日本大震災で被災した文化財を救出するため、官民あげての文化財レスキュー事業（被災文化財の保全、救出、応急措置等をおこなうもの）がおこなわれています。

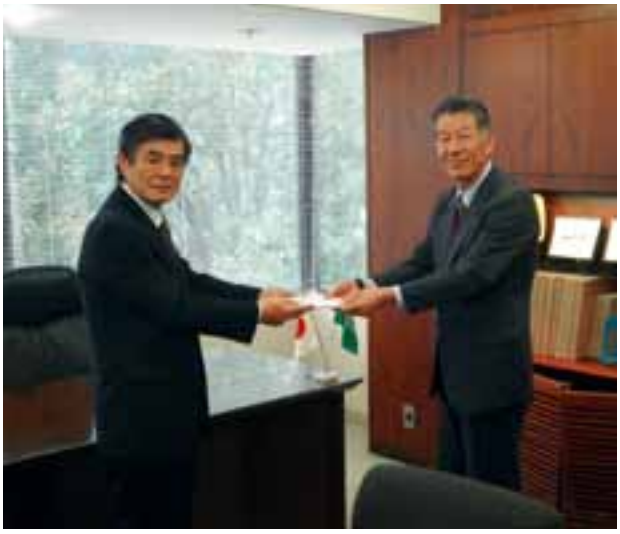
このような状況の中、文化財の宝庫であり、文化財の保護に理解と関心の深い「奈良」だからこそできることはないかと考え、奈良県内の文化財、教育等の関係機関・団体、企業等が連携し「文化財レスキュー応援せんと！」実行委員会を昨年の6月に設立しました。

実行委員会では、文化財レスキュー事業等への支援をおこなうために、それぞれが有する力を「奈良の力」として結集し、県内各所での募金活動をはじめ、公開講演会等での売上代の寄附、チャリティー事業の開催等をおこないました。その結果、3月までに、9,253,246円の義援金を集め、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団（平山財団）をはじめ、文化財保護の活動をおこなっている団体へ寄附しました。

寄附した義援金は、専門家の現地への派遣、支援物資の購入、冷蔵倉庫等の一時保管場所の確保、真空凍結乾燥等の応急処置等に充てられており、また、今後おこなわれる本格的な修理にも充てられる予定です。

実行委員会としての活動は3月で終了しましたが、被災文化財の救援、修復は、まだまだ息の長い活動になりますので、引き続きご支援いただきますようお願いします。

（研究支援推進部　田中 康成）



松村所長から平山財団への義援金の贈呈

東院庭園　よみがえる古代の宴

2012年5月3日から6日の連休4日間に『東院庭園　よみがえる古代の宴』をおこないました。具体的には、奈良文化財研究所平城宮跡資料館の改装にあたって新たに製作した調度品等の一部を東院庭園に持ち込み中央建物の東側に当時の宴の場を復元し、そこに高位の貴族と女官を配して宴の様子を再現しました。また、庭園内では衣装を着た女官たちがそぞろ歩き、お客様の記念撮影のモデルとなる等、天平時代かくばかり、と思わせるようなひとときが現出されました。

さらに飛鳥地区で活躍する劇団「時空」による大伴家持を主人公にした演劇や「ミューズクラスターカンパニー」による万葉集を題材にした朗詠や踊りが披露されました。

ご来園のお客様にはおおむね好評を持って迎えられたと自負してはいますが、衣装を着て座っている、歩いているというだけでは、お客様への訴求効果がやや足りなかった面は認めなければいけないと思います。今年の秋以降、さらに継続していくには、衣装を着ているというだけではない、何らかのイベント性も盛り込んでいく必要があるように感じました。

本イベントの開催にあたりましては、上記劇団「時空」の皆さん・「ミューズクラスターカンパニー」の皆さんに多大なご協力をいただくとともに、衣装を着用していただいた所員を含むボランティアの方々に篤くお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

（都城発掘調査部　杉山 洋）

再現された古代の宴の様子

「藤原宮跡資料室」の休日開館について

都城発掘調査部［飛鳥・藤原地区］では、奈良文化財研究所による藤原宮跡の発掘調査や研究成果の紹介を目的に、藤原宮跡資料室を1988年に設置し、以来、平日に限りその公開を続けてきました。しかし、かねてから藤原宮跡を訪れる観光客や一般市民の方々からの休日開館のご要望は強く、今回その声にお応えするため、橿原市地域振興局観光課等との協力体制のもと、2012年４月１日から、藤原宮跡資料室の年末年始を除く土・日曜日そして祝日の開館をおこなっています。

奈文研と橿原市は、この休日開館の実現のため、様々な準備をしてきました。開館以来四半世紀がたち痛んだ内装を新しいものに替え、あわせて展示品や開設パネルの一部もリニューアルし、さらに外国からの入館者への利便をはかるため、これまで日本語版しかなかった「特別史跡藤原宮跡」パンフレットについては英語、韓国語、中国語版を新たに用意しました。また、土・日曜日、祝日限定ですが、資料室へのアクセスを容易にし、かつ奈文研の飛鳥資料館、橿原市の藤原京資料室等周囲の文化施設を結ぶ周遊ルートを確立するために、近鉄八木駅を起点とするコミュニティバスが資料室前にも停車することになりました。

休日開館が始まって早２ヶ月、その開始にあわせて奈文研創立60周年記念展示「埋もれた大宮びとの横顔－藤原宮東面北門周辺の木簡」を実施したこともあり、約1,400名というこれまでにない数の入館者を迎えることができました。奈文研では、藤原宮跡資料室が観光客や一般市民の方々からこれまで以上に親しまれるよう、これからも様々な取り組みをおこなっていく予定です。

（都城発掘調査部　渡辺 丈彦）

リニューアルされた藤原宮跡資料室

パネル展「京都岡崎の文化的景観」

文化遺産部景観研究室では、京都市文化財保護課と共同で、2010年度から東山山麓の琵琶湖疏水が流れる岡崎地域を対象に、国の重要文化的景観選定に向けた調査を実施しています。その調査成果の報告展として、パネル展「京都岡崎の文化的景観」を2012年３月13日から22日の期間、細見美術館（京都市左京区岡崎最勝寺町）で開催しました。

現在の岡崎は、美術館や図書館が集まる文教地区としてのイメージが強いですが、時代をさかのぼると、明治23年（1890）の琵琶湖疏水開削を機に、舟運、水車、水力発電による工業地開発、博覧会開催と跡地整備による岡崎公園の誕生、疏水庭園群からなる別荘地開発等、京都の近代化を象徴する土地でした。さらには、江戸時代には聖護院蕪等の京野菜の一大産地、平安時代末期には六勝寺や院御所等の院政政治の中心地でもありました。ダイナミックに都市の姿を変え続けてきた岡崎ですが、時代を超えて岡崎の地を一つのまとまった形で捉えるとしたら、どのような見方がありうるでしょうか。

本パネル展では、「文化的景観」として岡崎の地を読み直すことを試みました。これは、現在の景観を目に見える眺めだけでなく、脈々と連なる歴史の中で、人々の暮らしと風土の間に生まれた景観を形作る仕組みから捉え直す試みです。展示内容は、「自然」、「歴史」、「生活・生業」の３つの視点から、文化的景観としての岡崎の読み解き方や、「疏水庭園と生態系」、「夷川ダムと水車利用」等をテーマにしたもので、写真、映像、イラスト図面等を交えて解説しました。

この展示を通して、岡崎の文化的景観の保護と、岡崎地域の将来像について考えるきっかけとなれば幸いです。

（文化遺産部　松本 将一郎）

展示会場の様子（会場からは東山と岡崎公園が望まれる）

飛鳥資料館の秘蔵物(2)　漏刻模型 ―時を司る―

飛鳥資料館のロビーでは現在、漏刻模型を展示しています。漏刻とはサイフォンの原理を利用した水時計ですが、当館の模型は中国の故宮博物院に遺されている清代の漏刻を参考にしてつくっています。おそらく、飛鳥の水落遺跡にも四段式の似たような形状の漏刻があり、飛鳥や藤原の人々に時を知らせていたのでしょう。

しかし、当館のロビーで展示している漏刻模型は姿形を再現しているだけではありません。漏刻の人形が手にしている箭(や)(目盛りが付いた棒)をよく見ていただくと、少しずつ動いているのがおわかりになるかと思います。これは模型内で水を実際に循環させて、実際の速さの48倍にして漏刻の動きを一部再現しています。当時は、この箭の動きによって時間を計っていたのです。目盛りの動きは本当に小さなものですが、都の時を管理する上では大きな意味を持っていました。飛鳥時代の陰陽寮の漏刻博士たちも同じように、きっと少しずつ動く箭に目を凝らしながら時を計っていたことでしょう。飛鳥時代の時を司った漏刻を見ながら当時のお役人の気分に浸るのも一興かもしれません。　(飛鳥資料館　成田 聖)

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで、月曜休館)　お問合せ：☎0744-54-3561(飛鳥資料館)

平城宮跡資料館の展示紹介　インフォメーションルーム「平城京周辺の写真地図」

資料館入口を入ってすぐのインフォメーションルームの床に、大きな写真地図(約1,700分の1)を展示しています。

これは、平城京の空中写真(2008年国土地理院撮影)に平城京の地割(条坊)を重ねたものです。写真画像は、2010年度に開催した国土地理院との合同主催企画展で使用した床展示がもとになっています。60枚におよぶ平城京のオルソ画像(空中写真に正確な位置情報を与え、ひずみのない画像に変換したもの)をつなぎ合わせています。

空から平城京域を見下ろすと、古代の地割や区画がよく残っていることがわかります。写真地図の上に乗って、じっくり観察してみてください。　(企画調整部　渡邉 淳子)

開館時間：9：00～16：30(入館は16：00まで、月曜休館)　お問合せ：☎0742-30-6753(連携推進課)

■　お知らせ

飛鳥資料館　写真展

2012年８月４日(土)～９月17日(月)

第２回写真コンテスト「遙かなる華の都」

飛鳥資料館　光の回廊

2012年９月15日(土)～16日(日)

特別公開講演会(東京会場)

「遺跡をさぐり、しらべ、いかす―奈文研60年の軌跡と展望」

2012年10月６日(土)

於：一橋大学　一橋講堂

日中韓国際講演会

「日中韓古代都城文化の潮流―奈文研60年都城の発掘と国際共同研究―」

2012年10月20日(土)

於：なら100年会館

■　記　録

文化財担当者研修

○庭園・自然名勝等保存活用基礎課程

2012年６月６日～12日　22名

○建築遺構調査過程

2012年６月18日～22日　12名

現地説明会

○平城第491次発掘調査(平城宮左京三条一坊一坪)

2012年６月23日　652名

飛鳥資料館　春期特別展

2012年４月14日～６月３日

「比羅夫が行く―飛鳥時代の武器と武具・いくさ―」

11,425名

平城宮跡資料館　春期企画展

2012年３月10日～５月27日

「発掘速報展 平城2011/文化財レスキュー展」

42,271名

■　最近の本

○諫早直人

『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』

雄山閣　2012年３月

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2012年6月